

懐かしく想いながら、彗星の寝台車の夢路をたどること

となった。

随 想

歴史と私

「佐伯史談」の編集をお引受けして、この号で二回目になる。

はじめ、この話を聞いたとき、「とにかくお引受けしなければいけない」と、何が何だか分らないままに、それが、まるで当然のことのように承諾の返事をしてしまった。あとで、どうしてこんなに簡単に返事をしてしまったんだらうと考えてみたが、どうしてもその理由は分らなかった。目に見えぬ誰かが「やるんだよ」とけしかけたような気もするし、一方では、「どうせ先は知れてるんだから、少しでも人の為に役に立つ仕事をしなけ

後 藤 知 久

(会員・佐伯市中山区)

れば」と、自分自身の中から呼びかけられたような気もするのである。

そんなはつきりしない気持で、第一回の編集に取組んでみた。寄せられた原稿の一つ一つを読んでいくうちに「やっぱり畑違いだったかな」という思いにかられた。それは、興味の無い世界というのではなく、どの原稿を読ませていただいても、日頃の研究のご苦労が思いやられて、「自分のようなものが」と、改めて自分の不勉強ぶりを思い知らされたからであった。

この思いは、次の図書館における「オランダ船リーフ

デ号の漂着は佐伯湾ではなかったか」という村井さんの研究発表、続いて宇目町探訪研修会に参加して、いっそう強く感じられた。

一つのテーマをどこまでも追求していく真しな態度、一つ一つの史跡を熱心に見て廻る心、そんな姿を目のあたりにして、歴史の研究というのは、こうしたことの積み重ねの上に成立つ学問なんだと、これもまた、改めて考えさせられた。

私も小学校から中学校にかけては、歴史はそう嫌いな方でもなく、成績も決して悪い方ではなかった。それがどういうわけか、大学へ行くようになって、なんとなく歴史がうとましくなり、当然のように成績もよくなかった。(どうしてこんなことになったんだろう)と考えているうちに、はたと一つの事に思いあたった。それは、通信教育で大学の教育を受けるようになった、最初の年のスクーリングの授業で受講した「日本政治史」が原因のような気がしたのである。

この講義は、ご存じの大化改新をめぐる天皇家の骨肉の争いを中心としたものであった。

戦前、私達年代の者は、国史の授業をはじめいるんな

機会で、「わが国は万世一系の天皇を上にいただき、その天皇は現人神におわす」と教わってきた。勿論、新しい憲法で、天皇は神ではなく人であるとの宣言で、戦前のままの感覚はなかったが、それでも、我々と同じ、いやそれ以上に血で血を洗うすざましさに、信じていたものに裏切られたような大きなショックを受けた。

戦争が終って、既に二十年の歳月が流れていたが、本格的に歴史の学問に取組んだのはこの時が初めてであっただけにショックが大きかったのかもしれない。

が、それよりも、たとえ戦争という大きな時代背景があったとしても、うその歴史を教えられたという怒りが大きかったのである。以来、私は歴史という学問が嫌いになったようである。

私は旅行が好きだから、よくひとり旅をした。そして行く先々の史跡をたずね廻った。しかし、この時以来、そんな興味も失ってしまった。そういえばこんなことがあった。あれは、宮崎県の高千穂だったか西都原だったかよく覚えていないが、その資料館に入った時、「こと耶馬台国とのつながりはどうなりますか」と聞いてすぐくいやな顔をされたのを思い出す。

そんな私だが、一つのことを調べてまとめることには大いに興味がある。これも大学時代のことである。

現在はどうなっているか知らないが、私達の時は通信教育では入学時に試験がない。そのかわり入学して二年ぐらいの間に、英・数・国の三科目の学力試験と面接試験を受けなければならなかった。その面接試験の時、私を担当した先生が、

「ところで卒業論文のテーマは決まりましたか」

と聞かれた。私は歌舞伎に興味があったので、

「まだ、これといって決めてはいませんが、歌舞伎の作者の中で、近松・南北・黙阿弥の三人に興味があるのでこの三人の作品の中から選ぼうと思っています。」

正直の処、一番興味のあるのは「四谷怪談」に代表される南北にひかれるのですが、一方では、近松の「女殺油地獄」の河内屋与兵衛にもひかれるんです。近松の心中物には抵抗を感じるが、江戸時代という義理と人情の封建的な世界に、まるで現代に通じるような主人公与兵衛が登場したのか、その辺に興味をひかれるのですが」

と私は答え、先生も歌舞伎に興味のある方で、その方の研究のための参考書を教えてくれ、

「もし、わからないことがあったら岩波の研究所にいつでも電話を」

と言って下さった。

卒業を二年後に控えて、私は本格的に卒業論文に取りかかった。書く以上は少しでもいいものをと、まず、資料集めに走り回った。

早稲田大学演劇博物館・国立劇場資料室、松竹本社図書館、勿論母校の図書館に何度も足を運んだ。このほか、この役を演じたことのある歌舞伎の俳優さんにも、与兵衛をどのように解釈して演じたのか聞いてみたかったが、この方はつてがなくてあきらめた。

時間は幾らあっても足りなかった。東京に在住する四十日間にできるだけ多くの資料を集め、参考書は主なものだけ購入し、これは帰って読めばよいと計画をたてた。午前中で授業が終る日は出掛け、午後も授業がある日は、学校の図書館で過した。今でもその時購入した書物は残っているが、中でも「徳川実記」全十五冊は、当時の価値で四万五千円もした。

論文は予定の期日までに二百字詰め原稿用紙で三百枚書きあげた。市内の印刷屋さんで製本してもらって送っ

た。一つのをまとめるという喜びを、このとき程感じたことはない。一枚一枚書いていくのが、まるで推理小説の謎解きをしているようで、胸がわくわくした。そして、ちょっとびりだが、私の歴史への認識を改めた。

その後、南北の作品も少し研究してみようと思ひ、筆を取って見たが、地方にいての資料探しのむづかしさ、また参考文献が容易に手に入らないことを教えられ、今更のように地方での学問のむづかしさを知った。だからこうして寄せられた原稿を見ていると、そのご苦労のほどが思われて頭が下がるのである。

皮肉なもので、そんな歴史嫌いだっただけに、学校を卒業して間もなく、「佐伯市史」編さん委員の仕事が舞い込んだ。広報の仕事しながらの仕事ではきついと思ひながら、働きながら大学で学ぶ機会を与えてくれたことを思い、それに報ゆる気持でお引受けした。

幸い、私の受持は「現代編」だったので、ほかの方のような苦労はなかった。それでも大分の県立図書館には足繁く通った。昼間は役所の仕事、夜は市史編さんの仕事と忙しい毎日だったが、今思えば、学校で学んだこともよかったが、この仕事を与えられ、充実した日々を送

れたことも、共にすばらしかったと思ひている。

それにしても、「佐伯市史」が発刊されて、早いもので、もう十五年も経つ。ときどき昔をふり返ってみては「もう、そろそろあれ以後のことをまとめておく方がいいのじゃないか」

と、別に頼まれもしないのに気にしたりする。あの頃は羽柴先生をはじめ、その道の権威者の方がいたが、そのうち何人かの人は亡き人の数に入ってしまった。

いま、私は少しずつ資料を集め、詳細にとまではないが、せめて糸口にもなればと、ひまを見つけてはその後の流れを調べている。みなさんのようなまねはできないが、何かをしなければという気持だけは、この会にいる間、持ちたいものだと思ひている。

さて、歴史嫌ひが好きになれるか、これからの楽しみである。